熱物質輸送国際センター（ICHMT）の 2011 年以降の活動

International Centre for Heat and Mass Transfer (ICHMT)
-Its Activities since 2011-

吉田　英生（京都大学）
Hideo YOSHIDA (Kyoto University)
e-mail: sakura@hideoyoshida.com

１．はじめに

熱物質輸送国際センター（ICHMT）の理事を筆者は2010年8月から拝命しておりますので，近況をご報告させていただきます. 同センターにつきましては本学会誌に何度か報告記事が寄せられており[1-3]，とりわけ直近2011年1月の笠木伸英ICHMT副会長による記事[3]は，極めて包括的に整理された内容の報告ですので, 本稿ではそれ以降の進展についてのみご報告します．なお，センターのウェブページ（http://www.ichmt.org/）には1968年9月の設立時の議事録をはじめとする充実した内容が掲載されておりますので, ぜひご覧下さい.

２．最近3回の理事会と吉報2件

これまで年に2回開催されてきた理事会は, センターが主催・協賛する国際集会の機会を利用してきました．2011年以降では,

・2011年7月 1日，Antalya，Turkey
・2011年9月11日，Minsk，Belarus
・2012年7月 4日，Bath，England

の計3回です．今年は都合により7月4日の1回のみですが, 国際伝熱会議アセンブリー（The Assembly for International Heat Transfer Conferences，AIHTC）が隔年で開催されることと同期して，同日午前にAIHTC会議，午後にICHMT理事会というダブルヘッダーになりました．実はこのような会議開催の形態（両組織の理事の重複も多い）こそ，国際的な伝熱分野の問題を明示しているのですが，そのことは後まわしにして, まず吉報2件をお知らせします.

一つ目は，センター運営･活動に多大な貢献のあった個人に対する2012年のICHMT Fellowship Awardが笠木副会長に贈られることが決定しました.

二つ目は, センターが主催･協賛する国際集会で発表された論文を対象として，最優秀論文に対するHartnett-Irvine Awardが以下の日本の研究者グループの論文に決定しました.

"A Molecular Dynamics Study on the Effects of Nanoparticle Layers on a Liquid-Solid Interfacial Thermal Resistance" by Takuya Matsumoto（松本拓也），Satoshi Miyanaga（宮永賢史）and Masahiko Shibahara（芝原正彦），The Asian Symposium on Computational Heat Transfer and Fluid Flow 2011, Kyoto, Japan.

なお，本会が11月13-15日に長崎で主催するThe Third International Forum on Heat Transfer（IFHT 2012）もセンター協賛の国際会議ですので，発表論文は同賞選考の対象となります.

３．ICHMT関連国際集会

2011年には表1に示すような国内での二つの交際会議がセンターの協賛のもとに開催されました. 先にご紹介したHartnett-Irvine Awardは，後者の京都での会議で発表されたものです．このようにわが国で開催される国際会議をセンターの協賛とすることにより，会議そのものに国際伝熱コミュニティのバックアップが得られますし，また逆にセンターに対してもいろんな面での貢献ができ，わが国の国際的存在感を増せる可能性があります. 今後，国際会議を企画される場合は積極的にセンターへの協賛を依頼されることをおすすめします. わが国からの提案であれば先約の国際会議との日程的オーバーラップがないかぎり，概ねサポートが得られると思います.

表1　ICHMTの協賛した日本での行事（2011年以降）

4th International Conference on Heat Transfer and Fluid Flow in Microscale (HTFFM-IV)	Sep.4-9 2011	福岡
Asian Symposium on Computational Heat Transfer and Fluid Flow (ASCHT-11)	Sep. 23-25 2011	京都

４．ICHMTとAIHTC

まず笠木副会長の前報告から引用させていただきます．

「センターと国際伝熱会議アセンブリーとの関係を見直すことが，もう一つの課題です．世界の伝熱研究者コミュニティを代表する組織が独立に二つあることは，前述の背景から考えてもマイナスが大きく，第14回国際伝熱会議の折りに，今後統一に向けて対話を始めるべきであるとの認識が共有されました．現在，アドホック委員会が設置され（メンバーは，A. Bar-Cohen, J.-M. Delhaye, K. Hanjalic, J. Padetと筆者），具体策を検討中ですので，近い将来に何か動きが出てくることが期待されます．（中略）　3年後京都の第15回国際伝熱会議は，少なくとも熱物質輸送国際センターが主催団体として名を連ねるべきではないかと考えております．」

上記の指摘どおり，BathでのAIHTC・ICHMTのダブルヘッダー会議では，このことが最も重要な議題でした．そして，笠木副会長がAIHTC副会長も兼務されて両者の融合に向け周到かつ粘り強い調停努力を続けてこられたことが実を結び，両者は今後できる限りの協調関係を見いだしてゆくことが両会議で満場一致で承認されました．

京都での第15回国際伝熱会議は，すでにICHMTの協賛を初めて得ることになっております．また，上記会議に先立ち，ICHMTとBegell House社の間で合意に至っていたICHMT Digital Libraryに加え，AIHTCと同社の間でも同様にIHTC Libraryとして，過去の全てのプロシーディングスを含め，今後のプロシーディングスをオンライン・アーカイブ化することが合意され，両組織の密接な連携が現実的になっていた状況もありました．

上記会議では，AIHTCとICHMTの協力連携に関して，より具体的なスキームを検討するための特別委員会（F. Arinc, A. Bar-Cohen, G. de Vahl Davis, K. Hanjalic, N. Kasagi, T. Simon）が設置されました．目標としては，伝熱・熱科学の国際連合組織を両組織を核として形成し，The International Council for Science（ICSU）のメンバーシップを獲得することです．なお，当面の組織的な融合形式としては，AIHTCの現在の自治権を尊重しつつ，AIHTCがICHMTの傘下に入るということが提案されています．

以上，この1年半ほどのセンターの動きをご報告させていただきました．ご提言やご意見がありましたら，筆者を含め，上記センター関係者にお気軽にお伝え下さい．どうぞ，よろしくお願い申し上げます．

参考文献

[1] 森康夫，国際熱・物質伝達センター（International Centre for Heat and Mass Transfer）について**24-95**, (1985) 23.

[2] 鈴木健二郎，International Centre for Heat and Mass Transfer（ICHMT）－その最近の活動報告と会員各位へのお願い－，伝熱，**43-182** (2004) 3.

[3] 笠木伸英，熱物質輸送国際センター（ICHMT）の最近の活動と今後の課題，伝熱，**50-210** (2011) 48.

2012年7月4日Bathでの理事会にて
左からA. van Steenhoven, P. Stephan, K. Hanjalic（副会長）, R.M. Cotta, G. de Vahl Davis（会長）

Y. Jaluria, N. Kasagi（副会長）, Y. Bayazitoglu

G.F. Hewitt, R.J. Goldstein, F. Arinc（事務局長）, T. W. Simon　　なお，写真には写っていませんが，L. Dombrovsky（A.I. Leontiev代理），J. Padet, H. Yoshida, X. Zhangも出席しました．（以上敬称略）